

## コメント1

京都大学

井狩彌介

この第一セッションで焦点に置かれた中心テーマは、インドの長い歴史の中でさまざまに育まれてきた「よく生きる」ことをめぐる多様な思考のありかた、そしてそのなかでもインド文化の伝統の中でひとのあるべき行動の指針をあらわすのに古代以来もっともよく用いられつづけてきた重要な概念である「ダルマ(dharma/dhamma)」のインド文化史のなかでの変容と発展とみることができる。

扱われる時代の異なるそれぞれの専門分野からの、四つの短いけれども充実した報告によって、われわれは、インドの長い歴史のなかでこの「ダルマ」の概念が多様な文化の接触と対立のなかで変遷しながらも、インドの文化史、社会史、宗教史のなかでひとつの重要な底流をなしつつ存続してきたという事実にあらためて強く印象づけられた。インド文明史の重要な転回点のそれぞれにおいて、「ダルマ」の概念は状況に応じた新しい読み直しを加えつつも、その基本性格を保持しつづけた。

Olivelle教授は、インド文明のもっとも古い時期に焦点を当て、最古の文献ヴェーダからのダルマ概念の変遷を扱い、ヴェーダに基礎を置く、いわゆるブラフマンの知的伝統から、マウリヤ朝のアショーカ王治下の仏教伝統へのダルマ概念の取り直し、さらにその後に展開したヒンドゥー伝統における概念の再編の展開を論じ、ヴェーダのダルマ観念から仏教、ヒンドゥーのダルマ観念への展開を指摘した。また、紀元後6世紀から9世紀に活躍したヒンドゥー法学、教学の有力論者のヒンドゥー法典注釈論書の議論展開から、ヒンドゥー法典の基本性格が、当時に広がっていた多様な社会集団の実際の慣例、慣習の記録にあったことを指摘した。

教授の提唱する、ブラフマン的知的伝統と仏教とのあいだの相互影響によるダルマ概念の変容と発展という視点はきわめて斬新で、重要な問題提起である。この点で、続いてのディスカッションでは教授にひとつの補足コメントをお願いしたい。すなわち、ヴェーダ期の祭式伝統のなかで展開したブラフマンの知的伝統と初期仏教との関連で、仏教が先行するブラフマンの知的伝統から「ダルマ」概念をどのように選びとって自己の葉籠中のものとしたのかについて、当時の状況をもう少し詳しく解説して頂きたい。このシンポジウムの参加者には仏教の歴史に深い興味をお持ちの方も多いため、シンポジウムの今後

の議論の展開のためにも補足をお願いしたい。

Menski教授はインド法制史の観点から、特に18世紀以降のイギリスのインド植民地支配の過程で起こった行政・司法の実践過程で、イギリス支配層、特に行政、司法関連の官僚のあいだの、インド土着法の伝統の基本性格についての誤解から生じたインド法制のゆがみについて論じられた。ヨーロッパ的な一元的な法支配と、インド土着法が基本に置いている多元的な社会の存在を前提とした法の多元性との対照が指摘された。

インド近代史における200年に及ぶ、司法行政におけるイギリス支配の影響は、独立後のインドの司法行政において未だ大きな後遺症を残し続けている。

その観点から、私はMenski教授に現代インドの司法における伝統的な法観念とイギリスが持ち込んで実際の司法行政に適用しつづけようとした司法観念のずれが現在どのような問題を起こしているのかについて補足コメントをお願いしたい。この問題を明確にしておくことによって、シンポジウムで展開されるだろう諸々のテーマへの基本視点が得られるからである。

古典仏教学の第一人者のひとりである桂教授の現代のダリットの新しい仏教運動の創始者アンベドカルの仏教理解、特に彼の「ダンマ」解釈についての分析はきわめて興味深く、論旨はきわめて明快である。また、若原教授の詳細なコメントが提示されているので、アンベドカルの仏教観についてほとんど無知である私はそれ以上のコメントを差し控えたい。

ただ一点だけ確認しておきたいのは、イギリス植民地支配期のインド近代のすぐれたエリートたちの思考パターンとアンベドカルの仏教理解との関連についてである。たとえば、ガンディー、ネルー、アンベドカルなどのインド独立運動の指導者たちは、英語での高等教育を受け、かつ若くして欧米に留学して、近代西欧思想を深く学んだうえであらためて自国の伝統についての考えを深めるという仕方での、いわば高等教育での教養形成において共通の型を持っている。この点で、たとえばアンベドカルの仏教理解における「ダンマ」の「理性的」あるいは「科学的」な側面はどのように位置づけられるのか、原始仏教における「ダンマ」解釈との比較などについて、考えを聞かせて頂きたい。

最後の報告、「ダルマ／ダンマ」の概念のインド古代から現代に及ぶ展開の概観を踏まえての田辺教授の提言は示唆するところが多く、その分析枠組みの大筋に同意し、支持したい。田辺氏の本報告は、インド文化史のなかでかたちを変えて繰り返し現れる重要な概念である「ダルマ／ダンマ」のダイナミズムを明快に説明しうる重要な言説であると思われる。

る。「ダルマ／ダンマ」の概念を歴史の節目において繰り返し起こった行為規範の見直し、取り直しのダイナミックな過程における焦点となる概念装置と位置づけ、この伝統的な観念がインドの歴史のなかで繰り返して取り直され用いられてきた活力の最大の理由を、西欧近代社会の「聖俗分離」の前提のもとで成立した世俗国家の思考枠組みの中で置き去りにされた社会と自然、俗と聖、全体と個の領域区分をあらためて見直す契機を与えること、そしてこの概念が社会と自然にかかわる生のすべての領域を覆うものとしてもちだされるからだという解釈はきわめて説得的である。

一点だけ指摘しておきたい事は、いわゆるブラフマン的な正統思考、正統文献のなかでの内的な対立／衝突（inner conflicts）の典型例として挙げられている『バガヴァッドギーター』、『バーガヴァタ・プラーナ』は、いずれもヴェーダ的なブラフマン正統思考に本来異質な思考様式である、唯一神への信愛（バクティ）の思想が融合されたもので、歴史的にみるとブラフマン的正統思考とこれに挑戦する対立的異端思考との接触によって生じた文化融合の興味深い例であることである。これはある意味では「ダルマ」思考の柔軟性、包含性を示すもので、インド思想全般における異質思考の融合の典型例のひとつと考えられ、その意味でインド思想におけるダイナミックな思考形成パターンを典型的に示すものでもある。